

### 第3回エメックス会議挨拶

ビルギッタ・ダール・スウェーデン国会議長、インゲマル・インゲヴィーク・ストックホルム市長、パリス・N・グレンデニング・アメリカ・メリーランド州知事をはじめご来賓の皆様、第7回ストックホルム・ウォーター・シンポジウム／第3回エメックス会議が美しい水の都ストックホルム市で、このように盛大に開催され、ご挨拶申し上げることは、私にとってこのうえない光栄に存じます。



はじめにこの席から私は満場の皆様に兵庫県民からの感謝の気持ちをお伝えしたいと

と存じます。1995年1月神戸をはじめ、約400万人が住む阪神・淡路地域がマグニチュード7.2の大地震で潰滅的な被害を受けました。その際、世界72カ国地域から多くの義援金、救援物資等温かい手をさしのべていただき、それは、被災者を勇気づける大きな力となりました。お蔭げをもちましてこれらの地域は着実に復興を遂げつつあります。ここに改めて感謝申し上げます。

さて、当地で1972年6月5日国連人間環境会議が開催され、そのときから人類の地球環境に対する新しい取り組みが始まりました。それから25年を迎える本年も、あらためて環境がキーワードとなる意義ある年と行って過言ではありません。去る6月23日からはアジェンダ21から5年の検証をする国連環境開発特別総会が開かれ、また12月1日には地球温暖化に対処する気候変動枠組条約第3回締約国会議（UNFCCC・COP3）が日本で開催され、CO2の削減目標等を決定される予定です。本日の会議は一連の地球環境問題に関連する重要な会議の一つであります。

第3回エメックス会議は淡水、水資源に関してレベルの高いストックホルム・ウォーター・シンポジウムと初めてジョイントで開催する画期的な試みであります。

閉鎖性海域は、人々の営みと深く関わっておりますが、海水交換が悪く、いったん汚染されるとその回復に長い年月と大きな困難をとまないとします。今回のメインテーマである「川から海へ」は陸域と海域の研究者等が垣根を越えて討議することにより、地球的規模の問題として川と海との共生を考える上で多大の貢献をもたらすものと考えます。

私は1994年国際エメックスセンターを世界各国の多くの関係者のご支援とご協力を得て設立いたしました。世界各地の閉鎖性海域は、一部の海域は改善が進んでいるものの、まだ、陸域から多量の汚濁物質が流入しており、富栄養化、貧酸素化、有害物質、更には油汚染も生じており、生物生息環境の悪化、生物種・個体数の減少、漁獲量の減少が生じています。

このため、各閉鎖性海域に関係する政府・自治体は、条約や同意に基づきそれぞれに対応した行動計画を作り、積極的に取り組んでいるものの、なお改善が進んでいないところも多くあります。

今後、世界の閉鎖性海域の沿岸部は、特に発展途上国沿岸で人口集中が進み、沿岸部の開発、産業化が促進され、このままでは閉鎖性海域は更に悪化していく恐れが強く、このことは地球全体にも大きな影響を与えると考えます。

国際エメックスセンターは、今までの国際会議の開催を通じて培ってきた人的ネットワークを活用し

て、世界各地の閉鎖性海域にかかる環境保全のため必要な事項の調査・研究をすることができます。そこで、国際エメックスセンターはまずそのためのシステムを整備し、問題解決への一層の取り組みを開始したいと考えております。

最後に、このジョイント会議の開催にあたっては、1年余の間、友情と献身的なご努力をもって準備をすすめてこられたスウェーデン側スヴェン・エーリック・スコグス  
フォッシュ・ストックホルム・ウォーター・カンパニー常務、マリーン・ファルケンマルク実行委員会委員長、ラルス・ウルムグレン副委員長をはじめ、委員の方と、ストックホルム・ウォーター・シンポジウム、ストックホルム大学の方々、多くのスウェーデンの方々に心からの敬意を表すものであります。

私は、今、スウェーデンと日本の交流の歴史が、18世紀後半の1775年日本が世界から隔絶していた頃に始まったことを想起しております。当時唯一認められていたオランダ船で来日した最初のスウェーデン人は、日本植物学の父として尊敬されているカール・ツンベリー博士でした。200年余の長い歴史を経て、今日に生きる私達が、地球環境の分野で友好の強い絆のもと行われることに心から感謝の意を表し、私の挨拶といたします。